

学習指導様式の国際比較 (II)

—日本・オーストラリア・韓国の構造比較—

梶田正巳 石田勢津子¹⁾ 伊藤篤²⁾
水野りか³⁾ 杉村伸一郎³⁾ 中野靖彦⁴⁾
石田裕久⁵⁾

問題

先の三国比較研究の論文(梶田ら, 1988)においては、行動レベルと信念レベルの双方について、個々別々に、一つひとつの質問項目の応答平均値を分析し、考察するというアプローチをとった。また、同一の内容を行動レベルと信念レベルという異なった水準で質問しているの、実際の行動と教師の内的な信念との間に「ズレ」があるのかどうかも三国で比較分析を試みた。こうした項目レベルの個々の分析では、三国間で実際にどの項目内容が異なるのか、という極めて具体的な行動や信念が明らかになる。こうした認識は、国際比較研究において、欠くことのできない基礎的な一面ではないと思われる。

とはいえ、こうした個々の項目に着目して研究するという手法の他に、教育心理学においてはしばしば、多数の項目の間に存在する相互関係の強さに注目し、それを少数の仮定される内的因子で比較・考察するというアプローチの取られることがある。多数の項目を使って比較分析をすると、非常に多くの側面において、対象となる文化の間に違いの現れることが普通である。こうなると時には、数々の相違を前にして、“それでは基本的な相違は何なのか？”を再び問いたい状況になってくる。いわば、多様性という樹海の中で、さ迷っている状態と同じことになっているのである。

こうなると、多様性をさらに簡潔に縮約することが必要になってくるだろう。こうした要求に基づいて適用さ

れる方法論が、項目の相関関係の強さを使って分析する相関分析法(correlational approach)であり、具体的には因子分析と言われるものである。

もう一つ、こうした項目を縮約することに意味があるとする論拠として、次のような指摘もできるだろう。すなわち、個々の項目は必然的にその他の項目とさまざまな関係を持つのであるが、厳密に言って、こうした関係は文化によって異なると考えられる。別の表現をすれば、同一項目、つまり項目の言語表現が仮に全く同じであったとしても、教師がどの文化、日本か韓国かオーストラリアのいずれの文化に所属するかによって、意味づけが異なると考えられる。それを調べる方法論が項目の相関分析である。具体的には、各国毎に因子分析をして、その構造を直接に比較してはどうか、という示唆が与えられるだろう。

本研究では、三国を個々に因子分析し、抽出された因子構造を直ちに比較するという方法は取らない。というのは、抽出される因子構造が三国で異なる場合、それを比較する共通の物差しを準備しておかないと、解釈が困難になるからである。ここでは一つの試みとして、三国に共通の尺度を作成し、比較するという方向で研究を進めることにしたい。

すなわち、三国全てのデータをこみにして因子分析を実行し、「尺度」としての因子構造を用意するのである。この場合、文化によって異なる項目の平均値の大きさが影響を与えないように、個々の項目の数値を偏差に置き換え、そのデータを因子分析をするという方法を工夫することにした。また、共通の尺度に影響を与えるものとして、データの大きさも考えられるが、今の段階では、この条件が今一つ確かでないのでコントロールしないことにする。

いずれにしても、三国を比較する基準の因子構造を設定するのである。次にそれとは別に、三国個々に因子分

- 1) 名古屋大学外国語大学(平成元年4月以降)
- 2) 名古屋大学大学院研究生
- 3) 名古屋大学大学院博士課程(後期課程)
- 4) 愛知教育大学
- 5) 南山大学文学部

析を実施し、尺度と同じ数の因子を抽出する。その後で、この基準となる因子構造を共通の物差しとした時、三国の個々の因子構造と基準となる因子構造とがどの程度近似したものかを、対応する因子毎に、特定の係数を算出して、類似性を比較するのである。すると、尺度となる因子構造との関係で、それぞれの国の因子構造の近似度が明らかになり、共通尺度の因子が解釈できれば、より縮約した観点から三国の比較が可能になると思われる。本研究においては、一つの試みとして、こうした方法論の適用可能性を検討することにしたい。

方 法

被験者 日本の小学校教師 212名、オーストラリアの小学校教師 132名、韓国の小学校教師60名であった。

質問紙 小学校教師の指導行動を記述した項目からなり、これらの項目に対し被験者は、自らの指導行動の頻度とその指導行動への賛否の程度を4件法および5件法で応答した。英語版、ハングル語版に関しては専門家の校正を得た。

分析方法 まず、検討するべき学習指導の対象を2つの領域に限定した。ひとつは、学級の管理や運営に関するもので、これを“Management”の領域とした。もうひとつは、学級内での授業中の指導に関するもので、“Instruction”の領域とした。この2つの領域に対応すると考えられる項目を、それぞれ梶田ら（1988）で使用された88項目の中から選択し、分析の対象とした。

次に、3国の因子構造の類似性を、それぞれの因子負荷量から総合的に判断するための分析を行った。3国が互いにどの程度類似した構造を持っているのかを検討するためには、3国のうちの1つの国の因子負荷量を基準として、それと他の2国との類似度を検討するのではなく、3国すべてのデータから基準となる因子負荷量を算出し、その基準と3国との類似度を検討する方法が必要となる。

具体的には、次のような手順で分析が進められた。まず、各国の偏差を用いて3国こみの因子分析を行い、バリマックス回転をし、「基準」となる因子負荷量を算出した。偏差を利用したのは、3国の平均の違いから疑似相関が生じる危険性を避けるためである。次に、この基準の因子負荷量と各国の因子負荷量との類似性を検討した。各国の因子負荷量はどのような回転を用いるかによって基準との類似性が異なってくる。そこで、プロクラステス直交回転（芝，1979）によって、3国の因子構造を基準因子構造に可能なかぎり近づけるように回転した。そうした上で、3国の因子構造と基準となった因子構造の類似性を、Wrigley & Neuhaus（1955）の示した

一致係数（CC：Coefficient of Congruence）（Levine, M. S., 1977）によって推測した。

CCは、

$$CC = \frac{\sum_{i=1}^k f_{1i} f_{2i}}{\left[\left(\sum_{i=1}^k f_{1i}^2 \right) \left(\sum_{i=1}^k f_{2i}^2 \right) \right]^{1/2}}$$

で計算され、最大値 +1、最小値 -1 をとる。このCCが.70を上回る因子構造に関してはきわめて基準となる因子構造との類似性が高いと判断し、その基準から構成された尺度の合成得点を国の間で比較した。

結果と考察

I. “Management” について

1) 指導行動

3国こみの分析で得られた基準となる因子負荷量と調査項目を Table 1-1 に示す。因子数は固有値 1.0 を基準として3因子と決定された（以下、基準となる因子分析の因子数の決定はすべてこれに準ずる）。次に、プロクラステス直交回転によって可能なかぎり基準に近づけられた3国別の因子負荷量を Table 1-2 に示す。

3国の因子構造が、因子毎にどの程度基準となる因子構造と一致しているのかを表す CC は、Table 1-3 に示すとおりである。この表を見ると、第2因子において、オーストラリアのみ CC が低い。このことは、オーストラリアの第2因子の負荷量の構造が基準の構造と一致していないことを示す。

類似性が高いと判断された因子に関して、類似した国の間で尺度得点を比較した。各尺度を構成する項目は、Table 1-1 内の枠で囲まれたものである（選択に際しては、いずれの因子にも負荷が.30以下の項目、複数の因子にわたり負荷が.30以上の項目は原則として除外した）。また、尺度得点の平均値、標準偏差および検定結果は Table 1-4 に示すとおりである。

第1因子は、さまざまな側面での生活指導上の指示を表す項目群で構成されていると判断し、「生活指導の指示」の尺度とした。Table 1-3 から、3国ともに CC が高いので、3国の尺度得点について一要因分散分析を行った。その結果、Table 1-4 に示すように、日本とオーストラリア、日本と韓国の間には有意差が見られた。日本の尺度得点の平均値は他の2国より高い。この結果は、係り・役割活動やグループ活動を通して責任を持たせるといった指導が他の2国に比べて多くなされていることを示している。

第2因子は、教材の選択や準備の方法、保護者との接触、担当する学年、問題が起きたときの対応、授業の運

TABLE 1-1 基準となる因子負荷量と項目 -MANAGEMENT (指導行動) -

No.	項 目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	共 通 性
10	係り活動はグループで責任をもたせる。	0.539	-0.001	-0.229	0.340
9	児童に委員や係りなどの役割を与える。	0.428	-0.020	-0.037	0.185
24	教科書、ノート、プリントなどの教材は家にもって帰らせる。	0.415	0.031	0.026	0.174
16	掃除はグループ単位で持ち場を決めて行わせる。	0.414	-0.090	-0.058	0.183
21	学習上の指示は黒板に明示する。	0.388	0.029	0.174	0.182
12	問題をおこした児童を授業後職員室に呼び注意する。	0.358	0.107	0.049	0.142
30	市販のワークシート、ワークブックなどを学年共通で採用する。	0.355	0.149	-0.034	0.150
31	ホームルーム、ショートタイムを行う。	0.318	0.195	-0.058	0.143
15	掃除は児童ひとりひとりに持ち場を決めて行わせる。	0.216	0.198	0.047	0.088
2	クラス全体に「静かにしなさい」などと注意する。	0.194	0.023	0.184	0.072
14	児童に教室の掃除をさせる。	0.147	-0.028	-0.074	0.028
28	市や町で採択された教科書を使う。	0.123	0.029	0.053	0.019
32	おやつ時間を取る。	-0.219	0.183	0.112	0.094
25	同じ教師が同一学年を繰り返し担当する。	-0.088	0.459	0.035	0.219
5	両親と日常的に学校で接触する。	-0.094	0.389	0.072	0.165
11	学力に近い児童どうしをグループにして指導する。	0.169	0.367	-0.096	0.172
18	休み時間に校庭で遊んでいる児童を両親が見守る。	-0.200	0.357	0.001	0.168
29	ワークシート、ワークブックなどの教材は教師が自分で工夫する。	0.064	0.352	-0.069	0.133
27	教師が自分の判断で教科書を決める。	-0.083	0.342	0.124	0.139
4	問題が起きたときは両親と密接に連絡をとって解決する。	0.176	0.338	-0.032	0.146
23	内容の区切りがいたら授業を終える。	0.144	0.319	0.007	0.123
19	教師が児童の家庭を訪問する。	0.045	0.319	-0.054	0.107
13	問題をおこした児童の指導は校長や専門家に任せる。	0.122	0.304	0.064	0.111
3	学習態度は家庭で身につけるよう両親に直接要請する。	0.273	0.301	-0.114	0.178
17	休み時間に校庭で遊んでいる児童を教師が見守る。	0.133	0.272	0.023	0.092
26	同じ教師が同一クラスを持ち上がりで担当する。	-0.119	0.192	-0.050	0.054
7	クラスのきまりは教師が決める。	0.080	-0.053	0.718	0.525
20	クラス内の掲示や飾りつけは教師が行う。	-0.048	-0.025	0.443	0.199
8	教室内の児童の座席の位置は固定している。	0.163	0.107	0.284	0.119
1	児童ひとりひとりに「静かにしなさい」などと個別に注意する。	-0.022	0.048	0.141	0.023
22	終了時間がきたらすぐに授業を終える。	0.109	0.002	0.127	0.028
33	児童と一緒に昼食を食べる。	0.040	0.065	-0.118	0.020
6	クラスのきまりは児童に決めさせる。	0.235	0.136	-0.534	0.359
因 子 寄 与		1.863	1.674	1.340	

学習指導様式の国際比較 (II)

TABLE 1-2 回転後の3国の因子負荷量 —MANAGEMENT (指導行動) —

No.	日 本			オーストラリア			韓 国			共通性
	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	
10	0.329	-0.038	-0.303	0.201	0.166	-0.200	0.662	-0.111	-0.256	0.516
9	-0.072	-0.091	-0.009	0.014	-0.047	-0.074	0.798	-0.109	-0.151	0.671
24	0.358	-0.003	0.084	0.135	0.017	-0.132	0.680	-0.111	0.054	0.477
16	0.454	-0.356	-0.149	0.355	0.379	0.011	0.239	-0.024	-0.102	0.068
21	0.296	0.142	0.130	0.125	-0.111	-0.014	0.446	0.003	0.576	0.531
12	0.360	0.241	-0.081	0.195	0.074	0.091	0.015	0.143	-0.073	0.026
30	0.387	-0.042	0.091	0.159	0.045	0.010	0.235	0.390	-0.240	0.256
31	0.108	-0.064	0.146	0.037	0.276	-0.148	0.251	0.543	-0.148	0.332
15	-0.008	0.386	-0.043	0.151	0.171	0.034	0.225	0.132	0.064	0.193
2	0.348	0.153	0.185	0.179	0.088	0.517	0.373	-0.010	0.157	0.049
14	0.032	0.020	0.132	0.019	0.120	-0.054	0.020	-0.274	-0.174	0.590
28	0.264	-0.245	-0.061	0.134	0.083	0.173	0.177	0.099	0.025	0.011
32	-0.532	0.440	0.092	0.486	0.065	0.234	0.051	0.024	0.109	0.014
25	-0.191	0.404	0.123	0.214	0.375	0.126	0.063	0.676	-0.081	0.464
5	-0.071	0.453	0.137	0.229	0.039	-0.219	0.172	0.214	0.194	0.105
11	0.054	0.329	-0.193	0.148	0.089	-0.042	0.122	0.492	-0.059	0.320
18	-0.151	0.410	0.021	0.191	0.136	-0.042	0.090	0.341	-0.016	0.193
29	-0.129	0.373	0.075	0.162	-0.217	-0.159	0.158	0.456	-0.130	0.309
27	-0.370	0.508	0.090	0.403	0.168	0.062	0.041	0.468	-0.021	0.514
4	0.062	0.181	0.166	0.064	0.552	-0.017	0.310	0.344	-0.117	0.453
23	0.199	0.257	0.203	0.147	0.066	0.056	0.007	0.417	-0.205	0.355
19	0.094	0.063	0.128	0.029	0.060	0.120	0.040	0.531	-0.233	0.344
13	0.201	0.438	-0.131	0.250	0.148	-0.120	0.186	0.347	0.140	0.260
3	0.373	0.328	-0.015	0.247	0.483	-0.102	0.314	0.214	-0.310	0.160
17	0.100	0.309	0.020	0.106	0.398	0.013	0.162	0.285	-0.030	0.339
26	-0.074	0.083	0.136	0.031	0.043	-0.276	0.091	0.638	0.080	0.448
7	0.100	-0.042	0.676	0.468	0.060	0.656	0.435	-0.143	0.498	0.269
20	-0.090	0.116	0.373	0.161	0.054	0.305	0.100	-0.293	0.680	0.557
8	0.085	0.138	0.305	0.119	-0.200	0.309	0.359	0.172	0.416	0.205
1	0.307	0.256	0.265	0.230	0.028	-0.184	0.070	-0.096	0.321	0.118
22	0.054	0.092	-0.005	0.011	-0.101	-0.031	0.012	0.002	0.369	0.253
33	0.078	-0.200	0.116	0.059	0.192	-0.064	0.047	0.123	-0.332	0.171
6	0.222	0.126	-0.459	0.276	0.148	-0.404	0.244	0.176	-0.437	0.259
因子寄与	1.947	2.356	1.430	2.794	1.569	1.568	4.210	3.313	2.311	

TABLE 1-3 各国の一致係数 —MANEGEMENT (指導行動) —

	日 本	オーストラリア	韓 国
FACTOR 1	.774	.906	.758
FACTOR 2	.834	.541 *	.886
FACTPR 3	.822	.800	.831

* : .70以下は一致度が不十分ゆえ、尺度得点は算出せず。

TABLE 1-4 尺度得点の3国比較 —MANAGEMENT (指導行動) —

	日 本 (J) MEAN (SD)	オーストラリア (A) MEAN (SD)	韓 国 (K) MEAN (SD)	F value	Tukey	t-test
FACTOR 1	27.76 (2.09)	23.52 (4.01)	24.03 (3.34)	89.34 **	J-A *, J-K *	
FACTOR 2	23.88 (3.23)	—	23.90 (4.91)			n.s. (J-K)
FACTOR 3	5.90 (1.08)	6.58 (1.25)	5.79 (1.63)	14.84 **	J-A *, A-K *	

** : $p < .01$, * : $p < .05$

営方法など広範な項目群で構成されている。これを「採用教材、担当学年、運営形態」の尺度とした。先にも述べたように、この尺度においては、オーストラリアのCCだけが低い (Table 1-3)。そこで、日本と韓国の尺度得点の平均値をt検定した結果、両国間に有意な差はなく (Table 1-4)、日本と韓国における学校の慣習的な管理面での共通性が示されたと言えよう。

第3因子は、「クラスのきまりや掲示などの決定」の尺度とされた。CCは3国ともに高く (Table 1-3)、尺度得点の分散分析の結果 (Table 1-4)、日本とオーストラリア、オーストラリアと韓国間に有意な差が見られた。平均値を見ると、オーストラリアが他の2国よりも高い。ここから、きまりや掲示に関しては、オーストラリアでは教師主導であることがうかがえる。

“Management”の領域は、国の教育的文化や学校の慣習・制度の影響を強く受けるため、3国の共通の次元として取り出された尺度の持つ意味が必ずしも明確なものとはなっていない。ただし、例えば、第2尺度に関していえば、この尺度を構成する項目のいくつかは、オーストラリアにおいて頻度の高い指導行動であり、また別のいくつかは頻度の低い指導行動であることが先の研究 (梶田ら, 1988) で示されている。この尺度はオーストラリアの指導の特徴を非常に強く表す項目を含んでいるにもかかわらず、構造全体としての特徴は抽出されず、基準構造との一致が低くなっているに過ぎない。

共通の次元上にあると判断された国間の構造比較から得られた結果は、次のような点で前回の研究 (梶田ら,

1988) の結果と一貫していた。日本の教師の生活指導の重視と学級運営上の制度面に対する斉一性の高さという特徴は、今回の第1尺度、第2尺度の「生活指導の指示」や「採用教材、担当学年、運営形態」の結果から確認されたと言えよう。

2) 指導信念

3国こみの因子分析を行い、固有値1.0以上を基準として因子数を3と決定した。この基準となる因子負荷量と項目をTable 2-1に示す。プロクラステス法によって基準に近づけられた各国別の負荷量をTable 2-2に示す。Table 1-1内の枠内の項目が各尺度を構成する項目である (いずれの因子にも負荷が.30以下の項目、複数の因子にわたり負荷が.30以上の項目は除外した)。

第1因子は、掃除や係り・役割活動をグループで行わせようとする「児童の役割や責任」の尺度であると判断した。第2因子は、保護者との非形式的な接触を表す項目から構成されており、「学級運営や家庭との関係」の尺度であるといえる。第3因子は、あらゆる側面の運営に関係しているが、項目の多くは教師ひとりで決定が可能なものである。そこで「教師の権限」の尺度とした。

3国の因子構造が、この基準となる構造とどの程度一致しているかを表すCCの結果をTable 2-3に示す。基準とのCCが.70以上の因子に関しては、その国間でF検定あるいはt検定を行って、尺度得点の比較をした。その結果がTable 2-4に示されている。

第1因子では、Table 2-3からも明らかのように、

学習指導様式の国際比較（Ⅱ）

TABLE 2-1 基準となる因子負荷量と項目 -MANAGEMENT（指導信念）-

No.	項 目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	共 通 性
10	係り活動はグループで責任をもたせる。	0.605	-0.009	0.137	0.385
16	掃除はグループ単位で持ち場を決めて行わせる。	0.570	-0.034	0.096	0.335
9	児童に委員や係りなどの役割を与える。	0.549	0.013	0.033	0.302
33	児童と一緒に昼食を食べる。	0.436	-0.074	-0.153	0.219
14	児童に教室の掃除をさせる。	0.420	-0.168	0.040	0.206
31	ホームルーム、シートタイムを行う。	0.391	0.285	-0.060	0.238
4	問題が起きたときは両親と密接に連絡をとって解決する。	0.374	0.307	-0.065	0.239
17	休み時間に校庭で遊んでいる児童を教師が見守る。	0.294	0.196	0.013	0.125
6	クラスのきまりは児童に決めさせる。	0.290	0.230	-0.283	0.217
24	教科書、ノート、プリントなどの教材は家にもって帰らせる。	0.286	-0.059	0.107	0.097
29	ワークシート、ワークブックなどの教材は教師が自分で工夫する。	0.252	0.234	-0.071	0.123
1	児童ひとりひとりに「静かにしなさい」などと個別に注意する。	0.192	0.063	0.191	0.077
23	内容の区切りがいたら授業を終える。	0.169	0.069	0.024	0.034
27	教師が自分の判断で教科書を決める。	-0.043	0.475	-0.059	0.231
19	教師が児童の家庭を訪問する。	0.277	0.443	-0.080	0.279
5	両親と日常的に学校で接触する。	0.103	0.440	-0.060	0.208
3	学習態度は家庭で身につけるよう両親に直接要請する。	0.056	0.435	0.148	0.215
18	休み時間に校庭で遊んでいる児童を両親が見守る。	-0.153	0.403	0.091	0.194
32	おやつの時間を取る。	-0.102	0.345	0.017	0.129
25	同じ教師が同一学年を繰り返し担当する。	0.018	0.224	0.203	0.092
11	学力の近い児童どうしをグループにして指導する。	0.033	0.196	0.175	0.070
26	同じ教師が同一クラスを持ち上がりで担当する。	0.071	0.143	0.053	0.028
7	クラスのきまりは教師が決める。	-0.007	0.001	0.507	0.257
13	問題をおこした児童の指導は校長や専門家に任せる。	-0.210	0.239	0.365	0.234
28	市や町で採択された教科書を使う。	0.125	-0.154	0.352	0.164
15	掃除は児童ひとりひとりに持ち場を決めて行わせる。	0.339	0.026	0.351	0.239
20	クラス内の掲示や飾りつけは教師が行う。	-0.072	0.078	0.349	0.133
2	クラス全体に「静かにしなさい」などと注意する。	0.126	-0.104	0.325	0.132
12	問題をおこした児童を授業後職員室に呼び注意する。	-0.016	0.198	0.323	0.144
21	学習上の指示は黒板に明示する。	0.287	0.050	0.321	0.188
8	教室内の児童の座席の位置は固定している。	-0.130	0.072	0.306	0.116
30	市販のワークシート、ワークブックなどを学年共通で採用する。	0.197	0.137	0.294	0.144
22	終了時間がきたらすぐに授業を終える。	0.071	-0.070	0.254	0.075
因 子 寄 与		2.504	1.734	1.633	

TABLE 2-2 回転後の3国の因子負荷量 -MANAGEMENT (指導信念) -

No	日本			オーストラリア			韓国			共通性	
	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3		
10	0.586	-0.016	0.106	0.550	-0.082	0.309	0.405	-0.079	0.262	0.691	
16	0.581	-0.027	0.140	0.523	0.363	0.050	0.408	-0.174	-0.464	0.466	
9	0.559	-0.026	-0.054	0.571	-0.131	0.197	0.382	-0.013	0.194	0.593	
33	0.614	-0.209	-0.114	0.433	0.142	-0.160	0.054	0.082	0.243	0.561	
14	0.625	-0.093	-0.035	0.401	0.178	-0.094	0.163	-0.442	0.139	0.345	
31	0.661	-0.008	-0.204	0.507	0.310	-0.058	0.356	0.417	-0.234	0.231	
4	0.559	0.106	-0.056	0.327	0.333	0.095	0.126	0.661	0.084	0.653	
17	0.337	0.257	-0.058	0.183	0.391	0.100	0.165	0.253	0.265	0.291	
6	0.228	0.227	-0.153	0.127	0.028	-0.303	0.164	0.374	-0.404	0.534	
24	0.408	-0.033	0.009	0.167	0.120	0.045	0.026	-0.191	0.219	0.229	
29	0.313	0.167	-0.307	0.480	0.128	0.276	0.323	0.456	0.499	0.473	
1	0.154	0.114	0.432	0.122	0.098	0.031	0.025	0.106	0.097	0.106	
23	0.143	0.233	0.096	0.232	0.074	0.026	0.060	-0.061	-0.015	0.041	
27	-0.088	0.626	-0.276	0.476	0.041	0.296	0.262	0.528	-0.328	0.431	
19	0.297	0.282	-0.074	0.174	0.359	-0.031	0.137	0.696	-0.192	0.661	
5	0.030	0.373	0.018	0.141	0.506	-0.169	0.285	0.541	-0.295	0.416	
3	-0.065	0.317	0.408	0.271	0.620	-0.034	0.407	0.546	0.004	0.299	
18	-0.240	0.523	0.096	0.341	-0.011	0.046	0.013	0.527	0.303	0.392	
32	-0.304	0.309	-0.001	0.188	0.259	0.142	0.145	0.380	-0.135	0.169	
25	-0.143	0.190	0.293	0.143	0.044	0.287	0.143	0.209	-0.339	0.168	
11	-0.231	0.130	0.297	0.158	-0.025	0.292	0.226	0.202	-0.500	0.383	
26	0.188	0.169	0.131	0.081	-0.011	0.022	0.009	0.209	-0.198	0.084	
7	0.031	0.095	0.412	0.180	0.105	0.499	0.299	-0.101	0.206	0.056	
13	-0.310	0.285	0.413	0.348	0.075	0.321	0.112	0.096	0.346	0.211	
28	0.076	-0.530	0.448	0.488	0.310	0.256	0.163	-0.147	-0.102	0.073	
15	0.281	0.249	0.424	0.321	0.293	0.092	0.355	0.315	-0.128	0.274	
20	0.049	-0.005	0.250	0.065	0.310	0.488	0.338	0.032	0.395	0.267	
2	0.207	-0.042	0.473	0.268	0.008	0.216	0.062	-0.155	0.091	0.089	
12	-0.149	0.186	0.416	0.230	0.225	0.266	0.170	0.132	0.174	0.076	
21	0.414	0.137	0.156	0.214	0.014	0.453	0.344	-0.124	0.300	0.108	
8	-0.012	-0.019	0.223	0.050	-0.128	0.464	0.250	0.303	-0.131	0.224	
30	0.133	-0.121	0.361	0.163	0.002	0.337	0.158	0.143	-0.399	0.256	
22	0.214	0.221	0.066	0.099	0.009	0.380	0.157	-0.486	-0.024	0.263	
因子寄与	3.829	1.994	2.248	因子寄与	2.740	1.817	2.135	因子寄与	3.894	3.823	2.398

原

審

学習指導様式の国際比較 (II)

TABLE 2-3 各国の一致係数 —MANEGEMENT (指導信念) —

	日	本	オーストラリア	韓	国
FACTOR 1	.942		.742		.881
FACTOR 2	.825		.592 *		.892
FACTPR 3	.888		.836		.160 *

* : .70以下は一致度が不十分ゆえ、尺度得点は算出しなかった。

TABLE 2-4 尺度得点の3国比較 —MANAGEMENT (指導信念) —

	日 (J) MEAN (SD)	本 (A) MEAN (SD)	オーストラリア (K) MEAN (SD)	韓	国	F value	Tukey	t-test
FACTOR 1	26.05 (2.72)	23.09 (2.98)	24.37 (3.07)			43.09 **	J-A *, J-K *, A-K *	
FACTOR 2	17.02 (2.86)		19.31 (4.58)					J-K **
FACTOR 3	27.68 (3.44)	33.16 (4.39)						J-A **

** : $p < .01$, * : $p < .05$

3国とも一致係数が高く共通の構造とみなしてよいと判断した。そこで尺度得点を用い分散分析を行ったところ、日本とオーストラリア、日本と韓国、韓国とオーストラリアの間に有意差が見られた。平均値の高さから (Table 2-4)、係りや役割を与えて責任を持たせたほうがよいと考えている教師が、日本、韓国、オーストラリアの順に多いことが示された。

第2因子では、日本と韓国的一致係数は高く、オーストラリアは低い (Table 2-3)。そこで、日本と韓国の尺度得点の平均のt検定を行ったところ有意差が見られた (Table 2-4)。このことから、オーストラリアの教師の指導信念には学級運営や家庭との関係に関する構造が日本や韓国ほどはっきりと見られず、また、韓国の教師のほうが日本の教師に比べて学級運営や家庭に対して積極的にかかわることに賛成していることが明らかになった。オーストラリアでは、日本や韓国と異なり、「自分の判断で教科書を決められるし、教師が児童の家庭を訪問することはほとんどない」(梶田ら, 1988)などが明らかにされており、これらがオーストラリアの低い一致係数の原因だと考えられる。

第3因子では、日本とオーストラリアのCCが高く、韓国のCCが極めて低い (Table 2-3)。そこで、日本とオーストラリアの尺度得点の平均のt検定を行った結果、有意差が見られた (Table 2-4)。ここから、韓国の教師の信念には、教師の権限にかかわる構造がないこと、また、日本の教師はオーストラリアの教師ほど強い権限を望んでいないことが明らかにされた。きまりの決定、問題を起こした児童の処置、持ち場を決めた掃除な

どの教師の権限に対するオーストラリア教師の肯定の強さは、梶田ら (1988) においても信念のレベルで明確に示されている。

II. "Instruction" について

1) 指導行動

基準となる因子負荷量が項目とともに Table 3-1 に、プロクラステス直交回転によって基準に近づけられた3国別の因子負荷量が Table 3-2 に示されている。

3国の各因子のCCは、Table 3-3 に示すとおりである。ここから、第2因子における韓国のCCが低く、基準との構造が一致していない。

以下、第1因子から第3因子まで、類似性が高いと判断された因子に関して、類似した国の間で尺度得点を比較した。各尺度を構成する項目は、Table 3-1 内の枠で囲まれたものである。なお、いずれの因子にも負荷が.30の項目、複数の因子にわたり負荷が.30の項目は原則として除外した。尺度得点の平均値、標準偏差および検定結果は Table 3-4 に示すとおりである。

第1因子は「動機づけ」にかかわる尺度とした。3国のCCはすべて高く (Table 3-3)、尺度項目が示すような指導方法によって、教師は国を越えて、児童の動機を高めようとしていることが示唆された。尺度得点の分散分析の結果は (Table 3-4) 日本とオーストラリア、オーストラリアと韓国に有意な差があることを示しており、オーストラリアの教師が非常に動機づけを重視していることが明らかとなった。

第2因子は「目標達成」に関する尺度であると解釈し

TABLE 3-1 基準となる因子負荷量と項目 -INSTRUCTION (指導行動) -

No.	項 目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	共 通 性
14	授業では児童が自発的に解決法を発見できるようにする。	0.614	0.022	0.073	0.383
27	学習への関心を高めるために教材を工夫する。	0.531	0.028	0.213	0.328
13	授業では主として考えさせる時間をとる。	0.518	0.031	0.042	0.272
18	児童の不得意な科目を出来るだけ克服させるように指導する。	0.464	0.197	0.238	0.310
19	児童の得意な科目を出来るだけ伸ばすように指導する。	0.455	0.099	0.152	0.240
23	クラスの児童一人一人の学習の進捗をチェックする。	0.452	0.023	0.285	0.286
26	授業は冗談やユーモアを交えて楽しく行う。	0.419	0.010	0.125	0.191
9	授業中いつでも児童に自由に発言させる。	0.326	0.092	0.227	0.167
10	教科の枠にとらわれず関連する内容を教える。	0.310	-0.126	0.259	0.179
5	授業の終わりに内容のまとめをする。	0.273	0.217	0.066	0.126
32	賞を与えて児童を励ます。	0.227	0.133	-0.059	0.073
22	小テストを行う。	0.156	0.540	-0.034	0.317
1	宿題を出す。	0.078	0.490	0.011	0.246
25	テストを返却するときには、一斉にその解説を行う。	0.183	0.454	-0.002	0.240
33	宿題をしてこなかった児童を罰する。	-0.072	0.451	-0.029	0.210
31	テストの範囲や重点を知らせる。	0.194	0.444	-0.052	0.238
12	授業では主として練習問題を解く。	-0.039	0.431	0.238	0.244
7	主として、ワークシート、ワークブックなどの教材で授業をする。	0.014	0.397	0.173	0.188
2	指導書を見ながら授業をする。	-0.020	0.372	-0.008	0.139
6	特定の教科書にしたがって授業を進める。	0.047	0.360	-0.140	0.151
24	テストの誤答を児童にもう一度やり直させる。	0.315	0.344	0.185	0.252
8	授業では学習課題を与えて自習させる。	-0.011	0.325	0.183	0.139
28	児童をお互いに競争させる。	0.198	0.318	0.168	0.169
15	授業は教師の説明を中心に進める。	0.029	0.267	-0.023	0.073
16	クラス内で学力の異なる児童には違う教材で指導する。	0.177	-0.078	0.631	0.435
3	授業は児童一人一人の進度にあわせて個別に進める。	0.064	0.016	0.627	0.398
29	児童一人一人の興味や関心に合わせた教材を与える。	0.272	-0.040	0.495	0.320
11	クラスの児童を校外に連れ出して体験的に学習させる。	0.250	-0.011	0.406	0.227
30	児童自身に教材や課題を選択させる。	0.121	-0.006	0.404	0.178
20	授業では課題研究(自由研究)を個人別にやらせる。	0.105	0.188	0.385	0.194
21	授業では課題研究(自由研究)をグループ単位でやらせる。	0.141	0.178	0.336	0.165
17	進度の遅れている児童を特に時間をさいて指導する。	0.275	0.097	0.332	0.196
4	授業は教師自身のペースで一斉に進める。	0.058	0.304	-0.350	0.218
	因 子 寄 与	2.605	2.464	2.421	

TABLE 3-2 回転後の3国の因子負荷量 --INSTRUCTION (指導行動) --

日本			オーストラリア			韓国			共通性			
No.	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	No.	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	No.	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	共通性
14	0.561	0.100	0.003	14	0.381	-0.015	0.328	14	0.517	0.354	0.104	0.253
27	0.382	0.131	0.267	27	0.594	-0.075	0.287	27	0.716	0.177	0.010	0.441
13	0.462	0.228	-0.187	13	0.466	-0.109	0.246	13	0.512	-0.036	0.373	0.289
18	0.573	0.062	0.213	18	0.138	0.268	0.286	18	0.670	0.176	0.346	0.173
19	0.474	0.012	0.197	19	0.296	0.093	0.300	19	0.329	0.531	0.159	0.186
23	0.466	-0.062	0.196	23	0.551	0.033	0.383	23	0.317	0.266	0.415	0.451
26	0.168	0.101	0.172	26	0.349	0.035	0.282	26	0.657	-0.072	0.105	0.203
9	0.259	0.097	0.220	9	0.285	0.079	0.318	9	0.559	0.242	0.207	0.189
10	0.269	-0.123	0.395	10	0.499	-0.261	0.113	10	0.107	0.377	0.143	0.330
5	0.348	0.224	-0.037	5	0.084	0.189	0.230	5	0.479	0.344	-0.013	0.096
32	0.166	0.096	0.012	32	0.489	0.089	-0.288	32	0.497	0.208	-0.336	0.330
22	0.250	0.366	-0.206	22	0.083	0.681	0.026	22	0.163	0.206	0.215	0.471
1	0.137	0.168	0.049	1	-0.129	0.666	0.108	1	0.585	0.179	-0.124	0.473
25	0.156	0.435	-0.187	25	0.126	0.540	0.063	25	0.245	0.325	0.232	0.312
33	-0.121	0.329	-0.007	33	-0.089	0.558	0.195	33	-0.098	0.441	-0.262	0.357
31	0.098	0.484	-0.152	31	0.124	0.541	0.171	31	0.185	0.435	-0.041	0.337
12	-0.034	0.419	0.312	12	-0.105	0.494	0.053	12	0.102	0.216	0.408	0.257
7	0.024	0.322	0.250	7	0.134	0.453	0.049	7	-0.092	0.248	0.203	0.226
2	-0.165	0.447	-0.044	2	0.131	0.342	-0.109	2	0.409	0.105	-0.006	0.146
6	0.081	0.406	-0.157	6	0.133	0.373	-0.192	6	-0.048	0.090	-0.009	0.193
24	0.443	-0.077	0.174	24	0.197	0.565	0.021	24	0.750	0.274	0.281	0.359
8	-0.074	0.269	0.329	8	0.217	0.461	-0.030	8	-0.295	0.390	0.177	0.260
28	0.103	0.337	0.257	28	0.406	0.421	-0.006	28	0.167	0.203	0.157	0.342
15	0.021	0.283	0.011	15	0.264	0.149	-0.319	15	-0.111	0.661	0.099	0.194
16	0.151	-0.048	0.604	16	0.297	-0.190	0.504	16	0.266	-0.098	0.675	0.379
3	0.067	-0.095	0.600	3	0.255	-0.041	0.443	3	0.136	0.120	0.641	0.263
29	0.129	0.001	0.499	29	0.599	-0.120	0.355	29	0.299	0.069	0.541	0.486
11	0.184	-0.146	0.356	11	0.239	0.132	0.444	11	0.323	-0.124	0.494	0.272
30	-0.087	0.134	0.528	30	0.296	-0.134	0.384	30	-0.010	0.396	0.336	0.253
20	0.066	0.219	0.390	20	0.068	0.308	0.250	20	0.111	0.075	0.485	0.162
21	-0.007	0.181	0.148	21	0.165	0.278	0.267	21	0.397	-0.043	0.649	0.176
17	0.359	0.149	0.129	17	0.326	-0.049	0.462	17	0.304	-0.041	0.502	0.321
4	-0.001	0.379	-0.307	4	0.100	0.322	-0.312	4	0.024	0.423	-0.480	0.211
因子寄与	2.357	2.087	2.623	因子寄与	3.076	3.823	2.489	因子寄与	4.829	2.693	3.849	

TABLE 3-3 各国の一致係数 —INSTRUCTION (指導行動) —

	日 本	オーストラリア	韓 国
FACTOR 1	.941	.860	.869
FACTOR 2	.892	.968	.692 *
FACTOR 3	.936	.844	.911

* : .70以下は一致度が不十分ゆえ、尺度得点は算出せず。

TABLE 3-4 尺度得点の3国比較 —INSTRUCTION (指導行動) —

	日 本 (J) MEAN (SD)	オーストラリア (A) MEAN (SD)	韓 国 (K) MEAN (SD)	F value	Tukey	t-test
FACTOR 1	29.91 (2.79)	32.35 (2.88)	28.74 (4.40)	34.86 **	J-A *, A-K *	
FACTOR 2	32.69 (3.46)	32.77 (4.85)	—————			n.s. (J-A)
FACTOR 3	15.73 (2.99)	22.72 (3.16)	16.53 (5.20)	167.79 **	J-A *, A-K *	

** : p<.01, * : p<.05

た。韓国の低い CC は (Table 3-3) この尺度項目が示すような指導が特徴として抽出されないことを示している。日本とオーストラリアの尺度得点の t 検定の結果、有意な差は見られなかった (Table 3-4)。この結果は、両国の授業における目標達成の指導方法とその程度に差がないことを示している。

第3因子は「個別指導」にかかわる尺度であると判断された。3国とも基準との CC は高く (Table 3-3), 3国こみの分散分析を行った。Table 3-4 から、日本とオーストラリア、オーストラリアと韓国間に有意差が見られた。オーストラリアの教師は、個別指導を行っていることが明らかにされた。

“Instruction” の領域は、個々の教師の意図が反映する側面である。因子の解釈が比較的明瞭になされたことから、各国の教師のこの領域での指導構造がかなりの普遍性を持つと考えられる。オーストラリアの「個別指導」が日本や韓国と比して多くなされているという結果は、梶田ら (1988) でみられた個別指導、児童ベースの指導というオーストラリアの特徴と一貫していた。

2) 指導信念

3国こみの因子分析を行い、固有値 1.0以上を基準として因子数を3と決定した。この基準となる因子負荷量と項目を Table 4-1 に示す。プロクラステスト法によって基準に近づけられた各国別の負荷量を Table 4-2 に示す。Table 4-1 内の枠内の項目が各尺度を構成する項目である (いずれの因子にも負荷が .30以下の項目、複数の因子にわたり負荷が .30以上の項目は除外し

た)。

第1因子は、負荷の高い項目の内容から、「動機づけ志向」の尺度とした。第2因子は、「個別指導志向」の尺度、第3因子は、「目標達成志向」の尺度と解釈された。

3国の因子構造が、この基準となる構造とどの程度一致しているかを表す CC の結果を Table 4-3 に示す。基準との CC が .70以上の因子に関しては、その国の間で F 検定あるいは t 検定を行って、尺度得点の比較をした。その結果が Table 4-4 に示されている。

第1因子では、Table 4-3 から明らかのように、3国とも一致係数が高く、共通の構造とみなしてよいと判断した。そこで、尺度得点を用いて分散分析を行ったところ、有意差は見られなかった。ここから、どの国の教師も、子どもを動機づけることに対して賛成していると言える。

第2因子においても、3国とも一致係数が高く、共通の構造を持つとみなした。そこで、尺度得点を用いて分散分析を行ったところ、日本とオーストラリア、日本と韓国、オーストラリアと韓国間に有意な差が見られた。Table 4-4 の平均値の大きさから、個人差に対応した指導に賛成する教師は、オーストラリア、韓国、日本の順に多いことが示された。

第3因子では、日本とオーストラリアは、基準との一致係数が高く、韓国のみ低くなっている (Table 4-3)。この尺度は「目標達成志向」に関するもので、先の指導行動の「目標達成」の場合と同様に、韓国でこのような

学習指導様式の国際比較（Ⅱ）

TABLE 4-1 基準となる因子負荷量と項目 -INSTRUCTION (指導信念) -

No.	項 目	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	共 通 性
24	テストの誤答を児童にもう一度やり直させる。	0.615	0.028	0.175	0.410
27	学習への関心を高めるために教材を工夫する。	0.560	0.262	-0.105	0.393
18	児童の不得意な科目をできるだけ克服させるように指導する。	0.542	0.256	-0.101	0.369
23	クラスの児童ひとりひとりの学習の進捗をチェックする。	0.532	0.286	-0.017	0.365
22	小テストを行う。	0.516	0.024	0.197	0.305
14	授業では児童が自発的に解決法を発見できるようにする。	0.510	0.314	-0.119	0.373
13	授業では主として考えさせる時間を取る。	0.505	0.312	-0.159	0.378
17	進捗の遅れている児童を特に時間をさいて指導する。	0.477	0.353	-0.123	0.367
19	児童の得意な科目をできるだけ伸ばすように指導する。	0.472	0.259	-0.122	0.305
5	授業の終わりに内容のまとめをする。	0.384	0.007	0.121	0.162
26	授業は冗談やユーモアを交えて楽しく行う。	0.381	0.213	0.037	0.191
32	賞を与えて児童を励ます。	0.218	0.142	0.147	0.089
20	授業では課題研究（自由研究）を個人的にやらせる。	0.035	0.626	0.144	0.414
30	児童自身に教材や課題を選択させる。	0.013	0.565	0.024	0.320
3	授業はひとりひとりの進捗に合わせて個別に進める。	0.218	0.538	-0.064	0.341
29	児童ひとりひとりの興味や関心に合わせた教材を与える。	0.261	0.477	0.019	0.297
21	授業では課題研究（自由研究）をグループごとにやらせる。	0.266	0.476	0.029	0.297
16	クラス内で学力の異なる児童には違う教材で指導する。	0.139	0.460	-0.000	0.231
11	クラスの児童を校外に連れだして体験的に学習させる。	0.320	0.447	-0.176	0.334
10	教科の枠にとらわれず関連する内容を教える。	0.217	0.406	-0.050	0.214
9	授業中いつでも児童に自由に質問や発言をさせる。	0.287	0.330	0.111	0.204
15	授業は教師の説明を中心に進める。	-0.147	-0.113	0.526	0.311
2	指導書を見ながら授業をする。	-0.053	-0.012	0.462	0.216
4	授業は教師自身のペースで一斉に進める。	-0.090	-0.070	0.446	0.212
28	児童をお互いに競争させる。	0.048	0.025	0.434	0.191
12	授業では主として練習問題を解く。	-0.210	0.227	0.409	0.263
25	テストを返却するときは、一斉にその解説を行う。	0.287	0.046	0.394	0.240
31	テストの範囲や重点を知らせる。	0.205	0.021	0.377	0.184
7	主としてワークシート、ワークブックなどの教材で授業をする。	-0.039	0.164	0.330	0.137
33	宿題をしてこなかった児童を罰する。	0.009	-0.008	0.329	0.108
6	特定の教科書にしたがって授業を進める。	0.128	-0.127	0.300	0.123
1	宿題を出す。	0.249	-0.128	0.274	0.154
8	授業では学習課題を与えて自習させる。	0.055	0.219	0.257	0.117
因 子 寄 与		3.566	2.991	2.061	

TABLE 4-2 回転後の3国の因子負荷量 -INSTRUCTION (指導信念) -

日本			オーストラリア			韓国			共通性			
No.	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	No.	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	No.	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	共通性
24	0.633	0.011	0.029	24	0.600	0.118	0.327	24	0.778	-0.181	0.034	0.480
27	0.535	0.266	-0.072	27	0.578	0.403	-0.204	27	0.675	0.070	-0.129	0.538
18	0.457	0.144	-0.069	18	0.664	0.164	-0.191	18	0.389	0.646	0.130	0.505
23	0.516	0.186	-0.156	23	0.579	0.398	-0.004	23	0.327	0.505	0.067	0.493
22	0.578	-0.109	0.275	22	0.444	-0.078	0.320	22	0.377	0.417	-0.128	0.305
14	0.661	0.198	-0.264	14	0.115	0.736	0.134	14	0.588	0.202	-0.229	0.573
13	0.459	0.291	-0.231	13	0.465	0.421	-0.063	13	0.632	0.294	-0.098	0.397
17	0.482	0.186	-0.168	17	0.659	0.279	-0.237	17	0.276	0.754	0.216	0.568
19	0.509	0.300	-0.085	19	0.522	0.127	-0.112	19	0.402	0.342	-0.269	0.301
5	0.551	0.009	0.001	5	0.278	0.125	0.215	5	0.351	-0.159	0.272	0.139
26	0.299	0.234	0.089	26	0.314	0.163	0.054	26	0.714	0.227	-0.111	0.128
32	0.181	0.113	0.296	32	0.190	0.123	0.127	32	0.619	-0.069	-0.324	0.068
20	0.032	0.720	0.157	20	-0.033	0.494	0.307	20	0.233	0.478	-0.114	0.340
30	-0.060	0.631	0.002	30	0.059	0.503	-0.067	30	-0.003	0.656	0.203	0.261
3	0.114	0.393	-0.040	3	0.415	0.573	-0.083	3	0.197	0.681	0.000	0.508
29	0.153	0.512	0.019	29	0.569	0.473	-0.119	29	0.232	0.789	0.257	0.561
21	0.250	0.483	0.008	21	0.005	0.540	0.258	21	0.428	0.497	-0.056	0.358
16	-0.058	0.372	0.081	16	0.473	0.410	-0.149	16	0.219	0.464	-0.331	0.415
11	0.319	0.374	-0.019	11	0.375	0.383	-0.127	11	0.290	0.509	-0.469	0.304
10	0.253	0.437	-0.025	10	0.125	0.403	-0.118	10	0.445	0.213	0.003	0.192
9	0.209	0.461	0.109	9	0.308	0.356	0.051	9	0.593	0.014	0.391	0.224
15	-0.189	-0.037	0.686	15	0.025	-0.264	0.320	15	-0.246	-0.096	0.459	0.172
2	-0.219	0.004	0.487	2	0.090	-0.131	0.512	2	0.139	-0.050	0.380	0.288
4	-0.134	-0.230	0.500	4	-0.117	0.267	0.278	4	0.071	-0.243	0.575	0.162
28	0.087	0.000	0.564	28	0.156	0.167	0.369	28	-0.349	0.071	0.293	0.188
12	-0.281	0.255	0.570	12	-0.067	0.188	0.360	12	0.020	-0.075	-0.191	0.169
25	0.248	0.078	0.285	25	0.234	0.200	0.451	25	0.159	0.057	0.534	0.298
31	0.199	0.095	0.321	31	0.264	-0.016	0.387	31	0.097	-0.005	0.533	0.220
7	-0.161	0.210	0.336	7	0.104	0.236	0.110	7	-0.155	0.144	0.577	0.079
33	-0.128	-0.169	0.329	33	0.152	-0.139	0.345	33	0.040	0.205	-0.019	0.161
6	0.165	-0.216	0.254	6	-0.014	-0.122	0.448	6	0.026	0.171	0.203	0.216
1	0.155	-0.159	0.162	1	0.338	-0.179	0.307	1	0.406	-0.100	0.616	0.240
8	-0.077	0.433	0.168	8	0.262	0.222	0.418	8	0.203	-0.253	-0.132	0.293
因子寄与	3.765	3.168	2.534	因子寄与	4.184	3.616	2.346	因子寄与	4.946	4.543	3.182	

原

普

学習指導様式の国際比較 (II)

TABLE 4-3 各国の一致係数 —INSTRUCTION (指導信念) —

	日 本	オーストラリア	韓 国
FACTOR 1	.966	.904	.886
FACTOR 2	.956	.922	.824
FACTOR 3	.948	.895	.641 *

* : .70以下は一致度が不十分ゆえ、尺度得点は算出しなかった。

TABLE 4-4 尺度得点の3国比較 —INSTRUCTION (指導信念) —

	日 本 (J) MEAN (SD)	オーストラリア (A) MEAN (SD)	韓 国 (K) MEAN (SD)	F value	Tukey	t-test
FACTOR 1	33.63 (2.80)	33.76 (3.10)	33.44 (4.00)	0.22 n.s.		
FACTOR 2	28.47 (3.47)	31.85 (3.73)	30.14 (5.37)	29.17 **	J-A *, J-K *, A-K *	
FACTOR 3	29.72 (3.81)	31.95 (4.87)				A-J **

** : $p < .01$, * : $p < .05$

指導における特徴が抽出されていないことは興味深い。日本とオーストラリアの尺度得点の平均値のt検定を行ったところ、有意差があった (Table 4-4)。このことから、目標を達成するために子どもにどのように働きかけるべきかという信念において、韓国教師は日本やオーストラリアの教師とは異なっていること、目標達成志向は、オーストラリアの教師のほうが日本の教師より強いことが明らかになった。

ここでも、先の研究 (梶田ら, 1988) での結果と一貫する点が見られている。特に、第1因子の「動機づけ」を、どの国の教師も普遍的に重視している点は、明らかに一致する結論である。

討 論

本研究では、3国の指導行動および指導信念を共通の次元だと判断できる尺度によって比較した。比較の対象とされた教師の学習指導は、“Management”と“Instruction”の2領域における行動と信念であった。ここでは、1) 共通の構造を取り出すための方法から得られた知見、2) 3国共通の構造上の尺度得点の比較から得られた知見、3) 2国共通の構造上の尺度得点の比較から得られた知見、について討論をする。

1) 構造の類似の程度を判断するための方法 (プロクラステス法および一致係数) から示されたのは、①3国間で共通の構造をなす尺度が比較的多く得られたこと、②一致係数から見ると、“Instruction”の領域のほうが3

国の教師間の普遍性が高いこと、③基準となる因子負荷の高い項目から見ると、“Instruction”の領域のほうが構造の明確な解釈が可能であり、しかも、同領域内の行動と信念の共通性が高いことの3点であった。

まず、①について述べる。2領域で、各領域に行動と信念とがあり、それぞれ3因子ずつが抽出された。このうち、3国ともに基準となる因子構造と高い一致を見たのは、“Management”の行動で2尺度、“Management”の信念が1尺度、“Instruction”の行動が2尺度、“Instruction”の信念が2尺度であった。Table 1-3, Table 2-3, Table 3-3, Table 4-3を見ると、“Management”の領域のほうが“Instruction”の領域よりも全体的に一致係数が低い。この結果から、先に述べた②の“Instruction”の領域での各国教師間の普遍性、共通性が高いといえる。確かに、学級の管理・運営の側面はその教師の属する教育的文化、制度、慣習や学校全体の方針によって左右される。このことは、共通の構造が“Management”の領域で明確に解釈できなかったことから示唆される。これに対し、授業中の指導という側面は、相対的にみて、文化から比較的独立した、人が人を教えるとき基本的営みにおける、個々の教師の指導観や指導法に規定されるため、一致の程度の高い構造が得られたと解釈できる。さらに、③で示したように、尺度を構成する項目の内容を検討してみると、“Management”の領域では、ひとつの尺度を構成する項目が多岐に渡り、解釈の困難な尺度が多く見られた。これに対し、“Instruction”の領域では、ひとつの尺度

が非常に類似した意味を持つ項目群で構成されており、明確な解釈ができた。また、行動と信念とに、ほぼ共通の尺度が得られた。行動のほうは、「動機づけ」「目標達成」「個別指導」で、信念のほうは、「動機づけ志向」「個別指導志向」「目標達成志向」と命名されているが、対応する尺度を構成している項目はほぼ共通しており、この領域での指導行動と指導信念の構造としての強い対応をうかがわせる結果である。

2) 共通の構造が確認された上でなされた、尺度得点の比較の結果について討論する。ここでは領域の枠はずし、まず指導行動について、次に指導信念について討論する。3国ともに共通の構造を持つと判断された、指導行動における尺度は、「生活指導の指示」「クラスのきまりや掲示」「動機づけ」「個別指導」の4つであった。「生活指導の指示」において、日本が他の2国よりも有意に得点が高かった。グループ活動や係り活動をとおして学級を管理するという方法は3国で共通であるが、最も多くこのような指導を行っているのが日本であることが明らかにされた。日本の小学生に見られる組織的な「班活動」などがこれに当たるのかもしれない。「クラスのきまりや掲示」「動機づけ」「個別指導」の3尺度においては、オーストラリアが他の2国よりも有意に得点が高いという結果であった。これは、当然、オーストラリアの指導の特徴を示す結果である。まず「きまり」に関しては、確かに、先の研究においてもオーストラリア教師の特徴となっている。ただし、「きまり」のレベルがどのようであるのかは今回の研究だけでは、はっきりしない。例えば、基本的で大枠のルールを教師が示し、あとは生徒個々の自主的な判断に任せるとか、非常に細かな規則によって管理しようとするなど、様々な指導が考えられる。「動機づけ」と「個別指導」も3国の教師が共通に持つ構造でありながら、オーストラリアの教師が多く行っている。動機を高めることと個別に対応することは、指導信念においても3国で共通の構造として現れているように、国を越えてどの教師も重視している指導の側面である。しかしながら、行動のレベルで日本や韓国の教師がこのような指導を行っていないという事実は、伝統的な一斉指導という指導形態から説明できるのではないかと考える。つまり、児童数が何名であっても、教師と児童が向かい合い、一斉に教師の説明を聞き、指示にしたがって一斉に作業するという形態からは、「動機づけ」「個別指導」という側面の指導行動は引き出されにくいであろうと考えられる。

次に、指導信念に移る。3国ともに共通の構造を持つと判断された尺度は、「児童の役割や責任」「動機づけ志

向」「個別指導志向」の3つであった。この3つの尺度は、尺度を構成する項目を見れば分かるように、ほぼ指導行動でみられた「生活指導の指示」「動機づけ」「個別指導」と対応している。3国間の尺度得点の比較結果が、先の指導行動の比較結果と同じであれば、信念と行動の対応が確認されることになる。まず、「児童の役割や責任」の尺度においては、日本、韓国、オーストラリアの順に得点が高く、すべてのペアに有意差が見られている。日本が、このような指導を最も重視し、それが実際に行動に反映していると結論できるであろう。韓国については実際の行動には現れなかったものの、信念のレベルでは、日本とオーストラリアの中間に位置している。「動機づけ」に関しては、信念のレベルでは、3国の教師に有意差が見られず、どの国の教師も共通に価値を置いている。しかし、指導行動では、先にも見たように、オーストラリアの教師だけが、この指導を多く行っている。日本と韓国では、「動機づけ」の側面に関して行動と信念にズレがあると言える。最後に、「個別指導」に関しては、信念では、オーストラリア、韓国、日本の順に平均値が高く、全ペアに有意差が見られた。日本の教師は、「個別指導」という構造を行動のレベルでも信念のレベルでも持っているにもかかわらず、相対的には「個別指導」から最も離れた指導を行っていると言えよう。韓国については、信念の上でかなり「個別指導」を重視しているが、それが行動に現れていないようである。

3) 本研究では、上述の3国ともに基準の因子構造と一致率の高い尺度だけでなく、2国が基準と一致すると判断される尺度についても検討している。2国間でのみ構造に意味があると解釈し、当該の国の間の尺度得点の平均値をt検定したわけである。まず、日本とオーストラリアとの比較結果を検討する。“Management”の信念における「教師の権限」の尺度では、オーストラリア教師の学級運営に対する積極性や問題行動に対する厳しい態度が示唆された。先の研究においても、同じ信念のレベルで、このような傾向がみられている。“Instruction”の行動における「目標達成」と、信念における「目標達成志向」の尺度では、前者に差が見られず、後者に差（オーストラリア>日本）が見られた。

次に、日本と韓国の比較結果を検討する。“Management”の行動における「採用教材、担当学年、運営形態」に関しては、結果と考察の所でも述べたように、オーストラリアで多く見られる指導とほとんど見られない指導が混在している尺度であり、非常に分散が大きいことが示唆される。また、“Management”の信念における「学級運営や家庭との関係」の尺度に関しても、同様

学習指導様式の国際比較 (II)

の理由で、いまひとつ日本と韓国の差が見られた原因を推測できない。したがって、3国の偏差を利用して作らした「ターゲット」としての基準因子負荷行列に対し、1国でも一致の程度が低いことが何を意味するのかを、実際のデータに即して今後検討していく必要があると考えられる。

ここで最後に、本研究で得られた主な結果と結論をまとめると。

1) 学級の管理・運営面における3国の小学校教師間の共通の次元は、「係り活動やグループ活動を通じて児童の責任感を育てる」ことを中心とした指導行動と指導信念および「教師が学級の規則を決めて児童を統制する」という指導行動であった。前者は、日本の教師が最も強く示す傾向が、後者は、オーストラリアの教師が最も強く示す傾向が明らかにされた。後者の結果は、児童の自主性を尊重しない指導だと捉えることもできるが、先の研究の結果から、オーストラリアの教師の主体性・独自性の反映だと判断できる。

2) 授業中の指導面において3国の小学校教師間の共通の次元は、「児童の動機を高めること」および「児童の

個人差に対応すること」を中心とした指導行動および指導信念であった。「児童の動機を高めること」の信念は3国とも同程度であったのに対し、行動においてはオーストラリアの教師に多く見られた。「児童の個人差に対応すること」については、オーストラリアの教師が、行動、信念ともに強い傾向を示した。日本の教師は、この尺度において最も弱い信念を示した。

文 献

- 梶田正巳・石田勢津子・伊藤篤・水野りか・杉村伸一郎・中野靖彦・石田裕久 1988 学習指導様式の国際比較 一日本・オーストラリア・韓国一 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 35, 137-162.
レビン M. S. 柳井晴夫・新田裕史(訳) 1984 人間科学の統計学 9 多変量相関分析の方法 朝倉書店
芝 祐順 1979 因子分析法 東京大学出版会
(1989年7月31日 受稿)

ABSTRACT

A Comparative Study of Elementary School Teaching Styles in Japan, Austraria and Korea (II)

Masami KAJITA, Setsuko ISHIDA, Atsushi ITO, Rika MIZUNO,
Shinichiro SUGIMURA, Yasuhiko NAKANO and Hirohisa ISHIDA

A cross-cultural point of view needs not only describing characteristics of the teaching styles in each country but also comparing them through the common structures. Factor analysis with Procrustes Orthogonal Rotation and Coefficient of Congruence were used to produce scales capable of comparing the teaching styles among the three countries. As for the class management it was found that Japanese and Korean teachers attach importance to the group-based responsibility, while teachers in Australia are liable to regulate their pupils their own way. Concerning instructional aspects, teachers among the three countries seemed to have a common and strong belief of motivating their pupils and Australian teachers appeared to put it into practice most clearly. It was shown, moreover, that both the notion of individual guidance and the execution of it were the definite features in elementary school teachers in Australia.